二〇二五年一月二十日

今日の給食は、いつもとは少し違った。教室ではなく、校長室で食べるのである。「五十周年記念・卒業前会食」と名付けられた会の日だ。先週から始まったこの会食は、五名ずつが校長先生と給食を一緒に食べ、会話を楽しむ時間である。シンジョー他四名は、教室で給食を作ってもらうと、校長室に行った。

少しいつもと雰囲気は違ったが、給食はいつも通りにおいしかった。食べ終わると、校長先生から質問が始まった。最初は「卒業を控えた今の気持ちは？」であった。

事前に、校長先生からの質問には、基本的に全員が答えるようにと、伝えられていた。

最初の質問、シンジョーの前に、四人が手を挙げて答えていった。

「正直言うと、さみしいです。仲の良い友達と別れてしまうし、六年間通った扇小に通えなくなるのは、ちょっと悲しいです。」

「複雑です。中学校生活も楽しみだけど、今のクラスが分かれてしまうのは、さみしいです。」

「大好きな扇小学校を卒業するのは、とても

さみしいです。今は、毎日を、しっかり生

活して、下級生に見本を見せたいと思って

います」

「中学校は楽しみです。部活はずっとやりた

かったので、ワクワクしています。でも、

友達や先生たちと別れると思うと、とても

さみしいです。今、毎日楽しもうと思って、

勉強もがんばっています」

四人が発言したので、自然とシンジョーの

番になり、校長先生は「では、シンジョーさ

んは？」とシンジョーの方を見た。シンジョ

ーは言った。

「あと少しで卒業すると思うと、なんだか不

思議な気持ちです。毎日、この学校に通っ

てきていたので。今のクラスのことが、と

ってもすきなので、このクラスのまんま、

中学校に行けたらいいなと、時々思ってし

まいます。」

校長先生は、メモを取りながら、ニコニコ

と話を聞いてくれた。

「今のクラスは、どんなクラスか？」「担

任は、どんな先生か？」「一年生の先生は誰

だったか？」などの質問の後に、シンジョー

が想像していなかった質問を、校長先生が口にした。

「小学校生活で、先生に怒られた思い出を話して下さい」

さっきまで、どんどんと手を挙げていた四人も、考え込んでしまった。

「あった！」と一人が手を挙げた。そして、話し始めた。

「たしか、二年生のとき、忘れ物をしたのに、黙っていて、出しなさいと言われたので、やってもいないノートを出したら、怒られた」

それからは、次々に発表が続いた。

「運動会の練習で、やる気がなかったので、クラスみんなが怒られた。先生がキレて、やる気がないなら、もう練習するな！と

かなり怒られた」

「校内音楽会の練習で、いつも口パクだったことがバレて、音楽の先生と担任二人に怒られた」

「委員会の仕事をずっとさぼっていて、それを友達に謝る時に、変な謝り方だ、心がこもってない、と怒られた」

シンジョーは、思いつかなかった。怒られたことがないわけではない。思い出せなかった

たのだ。校長先生は優しく、「自分のことじゃなくてもいいよ」と言ってくれた。その一言で、ある事件を思い出した。そして「友達のことなんですけど」と話し始めた。

「何年生のときか忘れたんですけど、先生が授業を早めに終わりにしてくれたことがあって、教室から出ちゃだめ、と言われたのに、何人かが廊下を思いっきり走って出ていったんです。その何人かが、次の授業に遅れて、それも廊下を走って戻ってきたので、先生が怒ったんです。いつも優しい先生が怒ったので、教室がシーンとなったので、

を思い出しました」

校長先生は、五人の思い出話を聞くと、こんな事を言った。

「怒られた思い出、特に小学校で怒られた思い出は、大事にした方がいいよ」

嫌なことを思い出させるなと思っていたシンジョーは、意外な話に少し驚いた。「怒られた思い出は大事にする」か。

校長先生は、最後にちょっと難しい質問をしてきた。「憧れている大人、こんな人になりたいという人は誰ですか」と。

シンジョー以外の四人は、すぐに思いつい

たようで、次々に発表した。

「大谷翔平です。世界中に尊敬されているし去年は、グローブも配ってくれた。あんな人になりたいです」

「母です。仕事も家庭も両立していて尊敬しているし、父も、母はすごい人だ、とよく言っているからです。」

「坂本竜馬です。日本を変えた人、本を読んで、すごい人だと思いました」

「令和ロマンです。二人とも、慶応大学を出たと言ってました。勉強もできて、おもしろくて、テレビに出ている、すごいなーと思います。僕もあんなふうに有名になりたいので。」

シンジョーは、一人思い当たる人がいたが、なんて言ったらいいのか、分からず、また最後になってしまった。シンジョーは、自分が最後の答えなので、少し早口に話し出した。

「ごめんなさい、校長先生。私は、塩澤校長先生です。二年生からよく休み時間遊んでくれたし、いつもかっこよく走ったり、遊んだりしていたし、子供が大好きな人だったと思うので」

シンジョーは、今の校長先生には悪いと思

ったが、正直に話した。校長先生も、「よく見ているね。いい人と出会って、シンジョーさんは幸せだ」と、笑顔で言ってくれた。

給食中の会談は、あっという間に終わった。楽しかった。校長先生からは、ちょっとしたプレゼントももらえた。校長室を出ていく時に、校長先生が、奇妙なことを言った。

「卒業まで、張り切って楽しんで下さい。そして、五十年後の扇小学校を、よろしくお願いします」

シンジョーは、ドキッとした。そうだ。未来の作文、五十年後の自分は、扇小学校で校長をしていると書いたのだった。校長先生は、そのことを知ってるのだろうか。十二月の終わりに提出したばかりだが、この校長先生は知っている気がした。

「五十年後の扇小学校をよろしく」をシンジョーに言ったのか、全員に言ったのかは、分からない。ただなんとなく、校長先生が最後に言った言葉は、嬉しかった。シンジョーは、会談の楽しさに加えて、最後の校長先生の言葉で、とても明るい気持ちになって、教室に向かった。

がんばって　楽しく　勉強しよう

大好きな　大好きな　この学校で

一緒に会談に参加した友達が、「おい、みんな無言清掃してるぞ」と、シンジョーを、注意した。

つい、校歌を歌ってしまったシンジョーは、はっとして「ごめんごめん」と、その子に、謝った。

シンジョーの顔は、少し赤くなっていた。